

【公報種別】特許法第 17 条の 2 の規定による補正の掲載

【部門区分】第 3 部門第 2 区分

【発行日】平成 26 年 8 月 21 日 (2014.8.21)

【公開番号】特開 2013-53088 (P2013-53088A)

【公開日】平成 25 年 3 月 21 日 (2013.3.21)

【年通号数】公開・登録公報 2013-014

【出願番号】特願 2011-191441 (P2011-191441)

【国際特許分類】

A 6 1 K 8/19 (2006.01)

A 6 1 K 8/73 (2006.01)

A 6 1 K 8/84 (2006.01)

A 6 1 Q 19/00 (2006.01)

【F I】

A 6 1 K 8/19

A 6 1 K 8/73

A 6 1 K 8/84

A 6 1 Q 19/00

【手続補正書】

【提出日】平成 26 年 7 月 3 日 (2014.7.3)

【手続補正 1】

【補正対象書類名】明細書

【補正対象項目名】0 0 0 9

【補正方法】変更

【補正の内容】

【0 0 0 9】

< 2 > 本発明の皮膚外用剤のホスホリルコリンを残基とするポリマー、コポリマー
 本発明の皮膚外用剤は、ホスホリルコリンを残基とするポリマー、コポリマーを、粉体に被覆させた状態で含有することを必須の構成要素とする。ホスホリルコリンを残基とするポリマー、コポリマーとしては、ポリメタクリロイルオキシエチルホスホリルコリン、メタクリロイルオキシエチルホスホリルコリン・メタクリル酸ブチルコポリマー(ポリクオタニウム 5 1)、メタクリロイルオキシエチルホスホリルコリン・メタクリル酸ステアリル(ポリクオタニウム 6 1)等が好適に例示できる。これらは唯一種を用いても良いし、二種以上を組み合わせ用いても良い。被覆はメカノケミカルに行えば良く、例えば、当該高分子の水溶液と、粉体とをコボルミルなどで処理し、しかる後に、水分を除去し、残渣を粉砕などすれば調整することが出来る。被覆されるべき粉体としては、化粧料などで汎用されているものが好ましく、中でも、板状の粉体がより好ましい。具体的には、タルク、セリサイト、マイカ、チタンマイカ、チタンセリサイトなどが好適に例示できる。粉体と前記ホスホリルコリン残基を有するポリマー又はコポリマーの好ましい質量比は、9 9 9 : 1 ~ 9 : 1 が好ましく、より好ましくは 9 9 : 1 ~ 9 5 : 5 である。本発明の皮膚外用剤においては、かかる粉体はホスホリルコリン残基の生理的効果を発現するベースとなり、ヒアルロン酸類と競合することなく水分保持機能を発現し、粉体含有皮膚外用剤の使用時に出現しがちな乾燥感の発現を抑制する効果を有する。このような作用を発現させるためには、前記処理粉体を 0 . 1 ~ 1 0 質量%含有することが好ましく、1 ~ 5 質量%含有することがより好ましい。